

ミニバラ No.1

〒731-0135 広島市安佐南区長束 3-32-16



TEL/fax082-238-3459

2003年7月発行

愛のまなざし

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。・・・あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。・・・偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。」(マタイによる福音書7:1~5)

三浦綾子さんの比較的初期の作品に「裁きの家」と言う小説があります。現代は家庭もまた裁き合う場であって、憩いの場でもなければ、許し合う場でもなくなっているのではないかと、言う思いが、この小説を書かせる動機となったのだと、三浦綾子さんご自身が語っておられます。この小説が書かれたのは1969年のことで、今から34年も前のことになるのですが、その現象は、今日弱まるどころか、益々強まってきているのではないでしょう。

新約聖書はギリシャ語で書かれているのですが「裁く」の原語は「クリノー」です。これから英語の、批評、批判、非難を意味するクリティシズムとかクリティークという言葉も生まれました。これは大変に暗示的なことで、人を裁くことは、自らに危機をもたらすことを、文字そのものが既に語っているのです。人の真意を誤解して、とんでもない判断を下し、後で分かって深く恥じ入るといことは、私たちのよくする経験です。しかし危機は、それだけでは済みません。人を裁くということは、自分を神の座に据えて、自分の物差しで良いとか悪いとか断定することで、やればやるだけドンドンと利己主義とか自惚れという自分の罪を増大させて行くことになるのです。すべてをご存知の神が、一切のことが明らかにされる最後の審判の日に、これらをお裁きにならぬわけがありません。

大体私どもは、人のおが屑のような小さな欠点や過ちも気になって仕方がないのですが、自分の目にある丸太のような罪には、ついぞ

気付かないのです。その昔、ダビデは、多少の成功に心のたがが緩んだのか、部下であるウリヤの留守に、その妻バテシバと密通し、発覚を恐れたダビデは、敢えてウリヤを激戦地に送り、戦死と見せ掛けて彼を葬りました。完全犯罪は成功したかに思われましたが、そうは問屋が卸しませんでした。神には何一つ隠されているものはないからです。預言者ナタンが神から遣わされ、ダビデを訪ねて、こんな話をしました。「或る金持ちが、遠来の客を持って成すのに、自分の羊を惜しんで、貧しい隣家のたった一匹の羊を盗み、これで客を持って成した」と。これを聴くとダビデは激怒して、「そんな男は死罪にすべきだ」と義憤をあらわにするのですが、その時、ナタンはすかさず「それはあなたです」と言い返しました。

私たちには、他人の罪は分かっても、自分の罪は中々分からないのです。ダビデがそうであったように、神の言葉を通して、神にお示し頂かなくては、自分の丸太のような罪は、決して分からないのです。しかし神は、私たちの丸太のような罪を示されるだけでなく、示されると同時に、それを取り除く道をもお示し下さるのです。キリストの十字架こそは、正にそのためのものでした。キリストは、私どもの丸太のような罪を自ら背負って十字架につき、ご自身の死と共に私どもの罪をも滅ぼし、私どもから罪を取り除いてくださったのです。

このことに私どもの心の目が開かれるとき、最早私どもは、人の目にあるおが屑を見ても、性急に裁くことはなくなります。同じ穴の貉であることを自覚するからでも、触らぬ神に祟りなしと、無関心を知恵と心得るからでもありません。自分に向けられたキリストの愛の眼差しが、おが屑を持つ者の上にも、同じように注がれていることを知るからなのです。

牧師 三輪恭嗣

(2003年5月25日主日礼拝説教より)